

2010 年度、M J E T 植林ツアーの記録

8 月 2 8 日～9 月 5 日



目次

要約	2
はじめに	2
1. 植林ツアー実施の概要	3
2. 植林日誌	6
3. 植林ツアーの課題	10
4. Than Sin Kyae 村への太陽光発電装置の提供	11
5. 交流会	12
6. 観光	13
7. 植林ツアー体験記	15
8. 植林ツアー後期	24
付録：	
1 植林ツアー参加者	26
2 植林ツアーの日程表	27
3 写真集	28
4 植林地図	32
5 East Phar Saw 村地図	40
6 Bagan 近郊地図	41

要約

目的	ミャンマー中部乾燥地域に位置するバガン郊外の村において、ミャンマー青少年と交流しながら、協働して植林を行うことによって、地域の緑化に貢献するエコ・ツーリズムを実施する。
期間	2010 年 8 月 28 日から 9 月 5 日まで
参加者	学生 4 名、社会人 6 名、計 10 名
植林の場所	Thant Sin Kyae 村の共有地と East Phar Saw 村の共有地
成果の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. Thant Sin Kyae 村と East Phar Saw 村の共有地において、村人と一緒に、計 1215 本の樹木を植林することができた。 2. 二つの村の人達と一緒に植林し、交流会を行ったことによって、お互いの理解と親睦を深めることができた。 3. バガンの雄大な遺跡およびボパ山近郊の寺院、風物、地場産業とビルマ料理を十分楽しむことができた。 4. ヤンゴン郊外にある、日本が協力した、1 つの施設を視察して、援助が役立っていることを確認することができた。 5. ヤンゴンのミャンマー日本仏教徒青年協会の会員と交流会を開催して、相互の理解と親睦を深めることができた。

はじめに

植林ツアー参加者 10 名（男性 4 名、女性 7 名）は、村人と共に、3 日間で 1,080 本の植林を行うことを計画していた。パートナーの The Nature Lovers Group の U Aung Din とスタッフは、事前にバガンに赴き、村人にオリエンテーションを行い、同時に、一緒に穴掘り等の準備を行った。また、僧院からも Daw Thin Thin Yi および U Moe Thwin Myint と Ma Aye Myint Than の 3 人が同行し、参加者と村人との間のコミュニケーションを円滑に図ることになった。MJET は出発前に 1 回の勉強会と 1 回の打ち合わせを開催した。また、特に交流会の準備として、バガンのホテルで、毎夜、夕食後、全員が踊りと歌の練習を行い、ヤンゴンにおいても、直前まで水祭りの踊りの練習を行った。

今回、二つの村の人々と一緒に交流し、植林を行うことができたが、二つの村はかなり異なった特徴を持っていることが理解された。両村の村長が交代し、新しい村長のリーダーシップのもとで植林と交流会が行われた。植林には多くの村人が参加し、また交流会には、村人全員が参加し、会場は熱気に包まれた。

1. 植林ツアー実施の概要

(神田道男)

(1) 植林地の概要

Than Sin Kyae 村の概要

Than Sin Kyae 村は、マンダレー管区に位置し、村の開始は、11 世紀のバガン王朝にさかのぼる。伝説によれば、Than Sin Kyae 村の由来は次のようである。

有名な王の 1 人である Alaung Sithu 王は、その王国を視察旅行した後の集まりにおいて、「彼の曾祖父までを含めて、自分ほどの力を持った王がいたであろうか？」と皆に尋ねた。彼らをあたたかも侮辱するような、誇り高い言葉を口にするために、ついに彼の両目は見えなくなってしまった。そこで、占い師は、王宮において、「王様の視力は、王様が侮辱された曾祖父様たちの像を建てて弁護なさった時にのみ、回復するでありましょう」と予言した。Alaung Sithu 王は、「それならば、彼らの像を建てるために相応しい、清らかな良い土地を見つけよ」、と家来に命じた。すると、Byatta という男が王様に奉る花束を清める清らかな池が見つかった。そこは偉大な祖父達の像を造るに相応しい浄土を得るのに格好の土地であった。祖父達の立派な像が造られ、その土地は伝統的な作法に従って立派に設えられた。Alaung Sithu 王は、彼の祖先の人々に祈りを捧げ、十分な尊敬の念を払った後に、王宮に戻られた。その後、彼の視力は奇跡的に回復したのであった。このような信じがたい出来事が起こったので、Alaung Sithu 王は、祖先を敬った土地と視力を回復した土地、すなわち、Kadaw Palin（祈りの場所）および Shinpin Pwintlin（視力回復の場所）にそれぞれ寺院を建立した。

Kadaw Palin は、2007 年に中田英俊氏がミャンマーの新年に咲く Padauk の木を植樹した寺院であり、バガンでもっとも有名な寺院の一つとなっている。毎年 4 月にその木は美しい花を咲かせている。祖先の像を造るに相応しい浄土が得られた Shinpin Pwintlin には、寺院を守る村が作られた。それは Kon Sin Kyae と名づけられた。やがてその名前は Kwan Sin Kyae へと少しずつ変化し、今では Than Sin Kyae と呼ばれるようになり、王様のボートを漕ぐ村（力のある人々）として知られていた。タンは、クリーンの意味で、シンチェは丘の意味。つまり、「清らかな丘」の村と詠われていた。

現在の村は、200 世帯約 1000 人が居住し、南にあるため池と隣接するパゴダ、格子状の街路を基礎に、集落を形成している。小学校と新しいパゴダを村の入り口（北側）に設置している。電気はない。水は、政府によりイラワジ河の川水を小学校の脇の貯水タンクまで圧送してもらっている。村人は人力による三輪車と二頭立ての牛車により、その 2 つの貯水タンク（1 つは MJET の寄贈）へ水くみにやってくる。観察では、午後 4 時から 5 時の間に、貯水タンクに水汲みにやってくる人達が多いようだ。人力三輪車は女性 2 名が運び、牛車は、男が多く、女性の場合もあるが、1 名である。小学校は、1 年生から 5 年生まで、約 100 人の生徒が在籍している。村には、集会所がなく、小学校の教室を使用している。

East Phar Saw 村の概要

East Phar Saw 村は、同じマンダレー管区にあり、Than Sin Kyae 村の南南西約 2 k m に位置している。村の伝説は以下のように伝えられている。

13 世紀、バガン王朝の時代に、ポパ山の近くの Seik Htein Phyu 村に一人の農民が住んでいた。彼は、畑を耕しに一人娘の Ma Saw をいつも連れて行き、木陰に休ませて、働いていた。ある時、彼女が休んでいると、一匹の毒を持たない大きなへびが、彼女に日陰をつくっていた。彼女が年頃になった時、Ponnyet という木を植えたところ、3 つの違った花が咲いたので、不思議に思った農民は、占い師に「どういう意味だろうか?」と尋ねた。すると、占い師は、「彼女は 3 代の王の妃になるだろう」と答えた。後に彼女は Uzana 王の妃となり (1250~1255)、その王が亡くなると、次の Narathihapate 王は、彼女の賢さを気に入って妃にした (1255~1287)。更に、次の王となった Kyaw Swa 王も彼女の賢さを気に入って妃にした (1287~1300)。その次の Sawnit 王も妃として迎えることを希望したが、その時、彼女はすでに 70 歳になっていたため、彼女を祖母として世話をすることにした。王は、彼女の栄誉を称え、仏塔を建てその仏塔の世話をするための村を近くに作った。仏塔は、最初 4 メートルで建設 (タンティア・ソア) されたが、後に、10 メートルに再建され、さらに 20 メートルに再建された。その村は、Phar Saw (Saw お婆さん) と呼ばれるようになり、今日に至っている。

現在の村は、100 世帯、約 500 人が居住している。南にある溜池とパゴダの北側に集落がある。入口に近いところに、村の集会場があり、隣接して、診療所がある。村の中では、栽培した綿から糸を紡ぎ、織物を作っている民家や、竹をマンダレーから購入し、漆器の下地を竹で作っている民家がある。いずれも、バガンの観光客を対象にしたものと思われる。小学校は 1 年生から 4 年生まで、28 人の生徒が在籍している。小学校の裏手に、UNICEF の援助で深井戸が掘られ、乾期には、この場所が取水場になる。雨期は、雨水を貯めて飲用に使う他、主として女性が、溜池から天秤に 20 リットル缶、2 個をさげて水を運んで水遣りをする。村の統率がよくとれており、集会場が拠点となっている。ここに、中国製の小型のジーゼル発電機があり、必要に応じ一部に電気を送ることができる。この意味では、タンシンチェ村より進んでいる。

(2) 植林の概要

今回は、二つの村で植林を実施した。Than Sin Kyae 村では、新しい村長の下で、緑化委員会のメンバーが中心となり、村の入り口の道路脇と小学校の校庭の空き地を整備して、70 本を植林することが出来た。East Phar Saw 村では、新しい村長のリーダーシップの下で、緑化委員会が村人を動員し、120～150 人が入れ替わり立ち代り参加し、M J E T ツアーメンバーとペアを作ると共に村人同士のペアも加わり、合計 1145 本を 1 日半で植林を終えることができた。植林した樹種とサイトは以下の通りである。

表 1 植林実績(2010 年度)

Species Sites	Kokko	Mazali	Tamar	Teak	Magyi	Yinmar	Kha-Yai	Eucalyptus	Total
Than Sin Kyae 村	10	20	19			1		20	70
East Phar Saw 村									
I 小学校	5		13	56	5			31	110
II								80	80
III			23	30	1				54
IV								396	396
V	12	16	56	27	20		2	27	160
VI	5		20	11				20	56
VII	31	6	47	4	19			14	121
VIII				64					64
IX			45	57		2			104
Sub total	55	37	197	238	42	1	2	558	1,145
Grand total	65	57	216	238	42	2	2	578	1,215

今年の雨季は、雨が多く、二つの村の池は共にほぼ満杯に近い状態で雨水を蓄えていた。植林の後、この池の水をブリキ缶で作った 2 つの水桶一杯にいれて、天秤棒でかついで運び、水やりを行った。2 杯の水は約 20 kg と重く、日本人の参加者は、自分で担いでみたが、とても重く、これらを池から植林した木々のところまで運ぶことは、大変な重労働に思われたが、村人たちは、慣れた手つきと姿勢でひょいひょいとかついで水遣りを行った。しかしながら、この水缶を運ぶ労働は、やはり重労働であることには間違いないと、思われた。

更に植林後にヤギの群れを連れた村人がやってきて、見る見るうちに数匹のヤギが植えたばかりのユーカリの葉をパクパクと食べてしまったので、驚いてヤギ達を追い払ったものの 5～6 本のユーカリの上の方の葉っぱが食べられてしまっていた。すぐに村長さんにフェンスを作るようお願いしたところ、翌日の朝には、フェンスが作られていた。

2. 植林日誌

(1) Melon グループ (総括：熊谷宣樹、出口紗絵子、神田道男、針貝純子、中嶋真美)

熊谷宣樹

今年は、昨年の Than Sin Kye 村から場所を変更し、East Pwa Saw 村での植林活動となった。昨年の植林活動と比べるといくつか改善点がみられたのでその点についてまとめてみたい。

今回の植林活動で改善されていた点は大きく分けて三つある。一つ目は、事前の準備である。現地に着し、まず今回植林を行う場所を視察しにいった。すると、木を植える場所には既に穴が掘られていた。去年も穴はある程度掘られていたが、深さがあまりなく、雨によって埋まっていた場所もいくつかあった。しかし、今回はちょうどよい深さであった。そして、次の日、植林活動を始めると、驚いたことに、村人たちは植林の手順についてほぼ完ぺきに理解していた。去年の場合は、コンポストを壊してはならないことや、そのコンポストを埋めるための穴をさらに作らなければならないことが理解されておらず、結局、植え直しとなった木がいくつかあった。しかし、今年はそのようなポイントもしっかりと押さえられており、スムーズに作業を進めることができた。現地で管理を行う Nature Lovers の AUNG DIN さんに話を聞くと、事前に村人を集めてレクチャーをしていたということである。

二つ目は、植林方法である。前回は日本人と村人の二人一組で植林を行っていたが、今回は日本人一人と村人二人という組み合わせで植林を行った。結果としてその方がコミュニケーションが円滑に進んだ印象をもった。なぜかという、村人と日本人が一对一の場合、お互いに恥ずかしいという気持ちと言葉が通じないという不安によって、なかなか会話が進まない。しかし、現地側にもう一人いることで、村人たちの緊張が和らぎ、興味を持って日本人に接してくれるのである。私はビルマ語を勉強しているのである程度の会話は出来るが、今回に限っては言葉の問題はさほど感じられなかった。みんな、やるべきことは理解しているので、ジェスチャーなどで十分コミュニケーションが取れていたようである。

三つ目は人数である。今回は村人が午前と午後を合わせて約120～150名ほど（子ども含む）集まり、植林に参加してくれた。村長が中心となって、効率よく作業が進められていた。やはり数は力であり、植林活動の初日にして作業の約8割が終了した。そのおかげで、休憩時間を十分確保することが出来た。去年は、休憩の時間が十分に取れず、村人も日本人も暑さによって集中力が切れてしまった場面もみられた。よって、短い時間で集中して作業を行うということは重要な要素であると改めて認識することができた。

このように、今年の植林活動は昨年の課題となった点がいろいろと改善されていた。これは、AUNG DIN さんの存在が非常に大きかったと私は思う。つまり、現地側で村人たちとの調整を行う人の存在が非常に機能していたということである。私たちは、一週間ほどで現地から日本に帰ってしまう。しかし、植林は木を植えた後の維持・管理のほうが大変である。植えられた木が枯れてしまうことや家畜に食べられるなどのリスクが常につきまとう。それを管理する Nature Lovers という組織は今

後も私たちの活動に欠かすことのできない重要なパートナーであるといえるだろう。

最後に課題を述べる。それはラベリングの問題である。上記にも述べたとおり、今回は二対一という形式で植林を行った。植林した木には村人と日本人の名前が記載されるが、人数が増えたことにより誰がどの木を植えたのかという点が今後、あいまいになる可能性がある。その点については改めて検討する必要がある。

(2) **Papaya Group:** (総括：今野安寿子、山田彩也香；藤村建夫、福永喜朋、里岡洋子)

今野安寿子

8月29日

午前9時タンシンチェ村を訪問し、昨年以前に植えた木の生長を確認した後、植林を開始しました。場所は水汲み場の前の道で、村人と二人一組で10本ずつ植えていきました。村人が準備して掘ってくださった穴がしっかりしていて、ほとんど掘りなおす必要が無く、また開始前のイラスト付き説明のおかげもあって植え方も土のかけ方も正しく行うことができたので、非常にスムーズに進みました。

昼食の後、イーストパッソー村の小学校に向かいましたが、強い雨が降っていてなかなか止みませんでした。そんな中でも村人は積極的に外に出て行き準備を始めたので、私たちも雨の中の植林を実行しました。このときは村人が多く集まってくだったので、二人と MJET メンバー一人の三人一組になりました。木を植え終わる頃に雨は止みましたが、私たちは泥だらけになってしまい、村のお水で手を洗わせてもらいました。

この日は、ビルマの楽器演奏や踊りを見ながら食事ができるレストランで夕食をとりました。本場の踊りを間近で見たところで、メンバーもホテルに帰ってティンジャンの練習をしました。この踊りはヤンゴンでの交流会で発表するものですが、実際にやってみると見た目よりもはるかに難しいので、練習初日はかなり苦戦しました。踊りのあと、学生部メンバーは「浦島太郎」ビルマ語劇の打ち合わせを行いました。

8月30日

午前8時頃ホテルを出発し、イーストパッソー村にて広い範囲にわたっての植林を開始しました。植えるべき場所は、必要な間隔を置いて穴が掘られていて、準備が整っていました。ほとんどの人が、木のビニールをはがすことや、穴の中心を掘ること、植えた木に支柱をつけることなどを手際よくこなしていました。またこの日も、参加者が大変多かったので、村人同士のペアもでき、次から次へと木が植えられていきました。途中で里岡さんと針貝さんが合流しました。木を植えた場所は土が固く、中心に植えるための穴を掘るのが多少困難でしたし、本数が多くさすがの村人達も疲れてしまっていたので、ペアで協力し交替しながら行っている姿が見られました。

時々、植える前の木からはがしたビニールを投げ捨てる人がいるのが目に付きましたが、一声かけるとすぐに拾って籠に入れていました。その後は必ず子どもが籠を持って植林しているそばを歩き、ビ

ニールをすぐ受け取りに来るようになりました。

村人の協力体制のお陰で、午前中だけでかなりの本数に達したため、お昼の休憩を長めにとり、午後は村のため池の近くに植えていきました。前日は雨でぬかるんでいた土が、すっかり乾いて固くなっていたので少しの苦勞で済みました。

一仕事終えて休んでいる私たちの横で、村人達は水を汲んで運び、木に撒いていました。この水を運ぶ道具はバケツ二つを紐で両端に吊るした板を肩に乗せる形式です。水を入れて持ち上げるとかなり重さがある上にバランス感覚が必要なので、非常に体力を使うものです。しかしこの仕事を担うのはほとんどが女性でした。何往復しても疲れた様子には見えませんでした。このように古くからの方法で新しい木を守っていく、村人の心構えと体制が整っているのには驚き、感心しました。

夕食はホテルの庭でいただきましたが、お花で書かれた「MJET NATURE LOVERS」の文字に感激しました。夕食後そのまま、他のお客様や従業員のいる中、庭で東京音頭などの練習をしました。

8月31日

前日にほぼ予定されていた本数が終了したため、余裕を持って活動を始めることができました。かなり日差しが強かったのですが、村の大人も子どもも集まり、和気あいあいとした雰囲気の中での植林でした。三日目ともなると、村の方々とも打ち解けてきた感じがあり、お互いの声かけや笑顔が見られました。

9月1日

この日の朝に中島先生が到着されたので、イーストパッソー村のパゴダ前に残してあったスペースに、最後の植林をしました。伺っていた去年の様子とは違って大きな困難もなくあっという間に終わったという印象でした。

エコから少し離れて、ツアーを楽しむということで、ポパ山へ向かいました。往復するバス内では、シャンペーボウとさくらの歌の練習を行いました。

夜はいよいよタンシンチェ村での交流会です。村に電気があるのかどうか心配しましたが、大きな蛍光灯で明るくなっており、さらに巨大なスピーカーまで用意されていたので、音楽もかけられましたし、進行もマイクを使うことができました。司会の福永さんによる説明とモーさんの通訳のお陰で、東京音頭や浦島太郎の導入はわかりやすく伝わったと思います。やはりシャンペーボウは誰もが知る曲だったようで、非常に喜んでもらえました。村の小学生たちの踊りは、かなり練習したということが伺えるほど皆はりきって、上手に披露していて楽しめました。

9月2日

バガンで過ごした最後の日です。早朝に日の出を見、ダマヤンジーとアーナンダー寺院を巡り、ダビ

イニユ寺院の傍にある日本人戦没者のお墓にお線香をあげました。

バガンで2回目の交流会は、イーストパッソー村で行われました。こちらでも、ライトとスピーカーが用意してありました。子供たちがビルマの踊りを披露してくれる中、停電したり音が途切れたり多少のトラブルも起こりましたが、それにすら大爆笑になるほど村の方々全員が交流会を楽しんでおられました。この日もシャンペーボウは大合唱になり、浦島太郎は前日より演技の要素が増して、出演者も楽しむことができました。

3. 植林ツアーの課題

(藤村建夫)

(1) 樹種の選定と植林地図の作成

- 今年は、パートナーの Aung Din さんが事前に現地を訪問し、あらかじめ、村人と一緒に 2.8m 間隔で穴を掘り、植栽穴毎の樹種別植林プランを事前に作成していた。これを、現地到着日に現場を訪問して確認した。また、当日朝に足りない植栽穴を掘った。
- 今回は、図面班が設置されており、植林後に植栽穴毎に樹種の名前を記入して確認して、植林図面を完成させた。後から送られてきた図面をみると、樹種の配置には、一定の配慮が行われたことがわかる。

(3) 穴掘りと有機肥料の準備

- 村人が、穴掘り作業と平行して、有機肥料（牛糞）を作り、一箇所に蓄えていたので、植林の際に各々の穴に有機肥料を搬入して小分けして投入したので、効率的であった。

(4) ラベルの作成

- 今回の方式では、植林のドナーの名前をつけたラベルが、植林された後に作成されたので、植林する際に誰と誰がパートナーとなって、どの木々を植林したかが不明であった。ラベルの作成を、事前に進め、植林の際に、パートナー同士が、自分たちの名前を確認しながら、植林を円滑に進めることが出来るように考えたい。このためには、日本からのドナーの名前と本数を 2 週間以上前に現地に送付する必要があるだろう。
- ラベルは、植樹予定図、樹種図とパートナー名をもとに、植樹の前に、予め準備する。パートナー名がはっきりしない場合は、そこだけ植樹時に記入する。
- 植林の番号は、植林寄贈者名ごとの通し番号とし、別途、植林予定図により、植林番号と植栽地が判別できるよう記録しておく。

(5) 植林実施の手順

- 植林チームの構成は、「実施主体」としての MJET、NLG および村の緑化委員会からなり、「実施拠点」は二つの村の共有地である。
- 実際の植林作業は、植林参加者（植林寄贈者を兼ねる）と村の植林参加者（僧院関係者等を含む）がパートナーとなって(今回は村人の男女)行われた。East Phar Saw 村では、120～150 人というたくさんの村人が参加したので、日本人とのパートナーが出来ない人達が多数いて、自分達で植林を行った。これによって、全体では 1 日半で植林が実質的に完了した。

(6) 水の確保

- 植林後の水遣りは大切であるが、村における水のプライオリティーは、飲み水、家畜、作物の順になると思われ、植林用の水の確保は課題である。今年は、運よく雨が多く、両村の池は 8 割方、満杯であった。今年の植林地域は、池や井戸に比較的近く、水遣りは大きな負担にはなりにくいといえる。

(7) メンテナンスとモニタリング

- NLG は、メンテナンスとモニタリングは、各村の緑化委員会の中に設置する考えである。両村の責任者に、デジカメを貸与して、6 ヶ月毎の写真と樹高の測定を依頼することになるが、その仕事を十分監理する必要がある。これは、NLG が責任を持って実施すること

になる。

- East Phar Saw 村では、植林後にヤギの群れが通り、すぐに何本かの木々の葉が食べられてしまったので、翌日には、植林をした土地の周りには、すぐに竹製のフェンスが作られた。

(8) 協力する村とのパートナーシップの構築

- 村人が植林に何を期待しているのか。植林された木の活用と処分をどのように考えているのかなど、長期的視点を考慮して、協力する村を決めていく必要がある。
- 現在のところ、現地側は、一緒に木を植える人をパートナーとしているが、日本側は、寄贈者および植林者をパートナーとしていること、ミャンマー側でも、複数の人が植林に参加することがあるなど、ラベルに記載するパートナーの考え方を整理していく必要がある。

4. Than Sin Kyae 村への太陽光発電プロジェクトの提供

(福永喜朋)

はじめに

公共給電施設の敷設されていない開発途上国の住宅、学校、病院等への LED 照明を利用した小型太陽光照明設備輸出を構想していたところ、MJET が日本からの植林ツアーを企画しているのを知り 2009 年 8 月に同行した。ツアーの合間を利用して、公共給電施設のない村の小学校及び住民からのコメントを聴取したが当方の提言に熱い反応が示された。

プロジェクトの目的、資金調達、他

開発途上国に対して、太陽光を利用した小規模 LED 照明を無償供与し、地域住民の生活の質を高め、地域社会に貢献する事を目的としている。これに要する資金は、日本及び世界の篤志家および企業からのフィランソロピー（博愛、慈善）精神に基づいた寄付金で賄うポリシーとした。プロジェクト資金を日本及び世界の篤志家および企業からの寄付金にて賄う事とした為、当方の組織を公にして信頼性を高める必要から非営利活動を基本とする NPO 法人設立を決意した。本年 10 月中に認可される予定。

プロジェクト概要

以下の要領で太陽光発電計画をすすめることとしたい。

- 本 LED 照明設備は全て村人への無償供与とする。
- 村の小学校集会室（15.59m x 6.62m）及び事務室（7.87m x 6.91m）に太陽光パネルを利用した LED 照明設備（白熱球 60w 相当）を 18 灯設置するもの。夜間集会、読書等が可能となる。
- 太陽光パネル 4 枚を小学校正面左側の校庭に地上置きとする。
- バッテリー、コントローラー等の機器類は事務室に設置する。
- 最低 10 年のメンテナンスフリー及びフェイルセーフの性能保持を目標とする。
- 製品は日本及びアメリカ製で、日本で仮組後、性能テストを完了して、現地へ海上輸送する。
- 現地据付けは、日本人 2 名が指導し、現地人 4～5 名で行う。
- 現地据付け（第 1 期）は、2011 年 8 月を目標とする

世界からの寄付金募集

- プロジェクト資金は、世界の篤志家からの寄付金で賄うものとし、本年 11 月から募金活動を始める。

今後の展開

募金が順調に集まり次第、小学校（第 1 期）に続いて村の個人住宅へ順次、LED 照明を据付ける。これによって、小学校が住民同志のコミュニケーションの場を提供することができるようになり、夜間集会が可能となり、昼間もパソコン、携帯電話使用可能となり、他地域との交流が飛躍的に拡大し、住民全体の生活の質の向上に繋がると期待する。本施設をショールームとして、村周辺にも働きかけ、周辺住民、地域有力者、地方自治体、他にも注目を喚起して更なる拡大に繋げたい。

5. 交流会

(出口紗絵子)

バガンの Than Sin Kyae 村および East Phwar Saw 村、ヤンゴンの僧院で交流会を開きました。MJET メンバーと村の人たち、または僧院の学生たちが交互に、準備した出し物を披露していきましました。

Than Sin Kyae 村(9 月 1 日)

村の小学校に通う子供たちが、学年ごとに分かれて踊りを披露してくれました。実はこの日の昼に学校を訪れた際、先生と子供たちが踊りの練習をしているのをちょっと覗いてしまいました。そのときは、交流会の出し物とは気づかなかったのですが、交流会のために一生懸命練習してくれたのか、と思うと嬉しかったです。ミャンマーで踊りというと、伝統的な衣装を着て、あの手首がどうなっているのかと思うような踊りを思い浮かべるのですが、ここの子供たちが踊ってくれたのは、かなりモダンな踊りで、小さな女の子がヒップホップを踊っていたのはかなり新鮮でした。

MJET 側の出し物は、歌（北国の春・桜）、東京音頭、シャボン玉、劇(浦島太郎)でした。北国の春をビルマ語で歌い始めた途端、ざわめきが起きました。シャボン玉は、10 名ほどの子供にふいてもらいました。初めてなのかとても真剣な表情でふいていました。劇は、言葉が通じていないとうまくいかないものですが、クライマックスで藤村さんがお爺さんになって、現れたとき、会場が大いに盛り上がったので、わかってもらえたのか、と一安心でした。

交流会の後、学校の先生たちが夕食を用意していただきました。この村に温かい気持ちで受け入れてもらえているのだなということを、ひしひしと感じました。

East Phwar Saw 村(9 月 2 日)

ここでも村の子供たちが踊りを披露してくれました。Than Sin Kyae 村とは違って、ここでは民族衣装を着た踊りを見せてもらいました。寸劇が組み込まれたような踊りで、笑わせてもらいました。

女役で踊っていた子が実は男の子だったというサプライズもあり、大変楽しかったです。

MJET 側の出し物は Than Sin Kye 村と同じでした。しかし、同じことをやっても、村の人たちの反応は Than Sin Kyae 村とはまたちょっと違うように感じました。北国の春を歌った際、多くの村の人たちが合わせて歌い始めてくれたのです。感動しました。

僧院(9月4日)

学生が日本語で一生懸命司会をやっていました。プログラムの説明、開会あいさつなどもあり、この会に対する意気込みが感じられました。竪琴、ミャンマーの踊りの他に、日本語を勉強している学生らしく、日本語の歌も披露してくれました。その歌は、実は昨年の交流会で、MJET 側が出し物として披露した歌のようでした。昨年、その歌を聞いて、それから今回の交流会に向けて1年間練習したのでしょうか。そう思うと、その姿勢がとても健気に感じられました。

MJET 側の出し物は、バガンのときとほぼ同じで、ただひとつ東京音頭をミャンマーの水祭りの踊りに替えて披露しました。手拍子してくれたり、私たちの歌に合わせて口ずさんでくれるなど、こちら側の出し物を楽しんでもらえている様子でした。僧院の学生たちが、年に1回のこのイベントを、本当に大切にしているのだということが窺えました。

6、観光

(山田彩也香)

●30日 パゴダから眺める夕焼け

私たちが植林をおこなったバガンは世界的にも貴重な仏教遺跡のひとつであり、平野部一帯に大小さまざまな仏塔や寺院が林立している。30日は植林を終えた後に、パゴダへ登って夕日を眺めた。雨季とあって雲が少し邪魔だったが、パゴダへ登るとあたり一面が見渡せ、素晴らしい景色を眺めることができた。日没を前に藤村会長の提案で15分くらいの間おしゃべりを止め、美しい自然に目と耳を傾けた。大変素晴らしい時間だった。鳥やカエルの鳴き声がしてとても良い雰囲気だったのだが、あとでカエルの鳴き声は偽物だったことがわかり、だまされたなーと思った。

●31日 考古学博物館とサンセットクルーズ

博物館ではガイドの方が英語で説明をしながら案内してくれたが、館内は締め切られていて空気が悪かったのもあって、なぜかきつい見学となってしまった。どんどん脱落者が出て、最後の方はもはや福永さんとガイドさんのマンツーマン状態だった。カツラの展示など、とてもシュールな展示もあった。

夕方はサンセットクルーズへ行った。船の周りにたくさんの売り子がやってくるのだが、「お兄さんカッコイイネ」と熊谷さんばかりモテていた。船の上はとても涼しく、川沿の珍しい景色などを眺めながらクルーズができて気持ちよかった。日没近くになると、船を止め夕日をゆっくり眺めることができた。日没の瞬間は雲に隠れて見れなかったものの、パゴダから見たときの夕日とはまた違い、大変素晴らしかった。

● 1日 オールドバガン、ポッパ山

この日はまずオールドバガンへ行った。椰子酒を作るために椰子の木に登る様子や、牛にピーナツ油をひかせる様子を見せてもらった。日本では見られない光景だった。ここではお土産を買うことができ、椰子酒や黒糖を買ったり、タナカの体験をさせてもらったりした。その後、バスでポッパ山へ向かった。参道口近くでバスを降り、頂上目指して急な階段を上っていった。途中野猿に襲われるというハプニングもあったが、誰もリタイアすることなくなんとか全員で登りきることができた。遠くから見ると本当に登れるのかと思うほど高いところだが、実際に登ってみると案外大丈夫で、休憩を挟みながら大体 20～30 分で登れた。頂上からの眺めは抜群で、登った甲斐があったなあと感じた。

● 2日 パゴダ見学

バガンへ来て 4 日目にしてやっとゆっくりパゴダ見学ができた。ダマヤンヂー寺院はこの寺院が建てられた背景から、幽霊が出るといわれているそうだが、皆さんの写真には何か写りこんでいたのだろうか。また、バガンの遺跡を代表するアーナンダー寺院はとても大きく、バランスのとれた美しい寺院である。ここには 4 体の仏像が納められていて、そのうち 2 体は近くで見たときと離れてみたときとで表情が変わるという細工が施されていて、大変興味深かった。次回はもっと他のパゴダも見学できたらいいなと思う。

● 3日 白いゾウとシュエダゴン・パゴダ

ゾウに乗ってバゴーへ行く計画がだめになってしまったため、空港近くの白いゾウを見に行った。希少な白いゾウは、ミャンマーでは「国家に平和と安定、繁栄をもたらし、災厄を遠ざけ、豊作を約束する」と信じられており、とても神聖な動物なのだそう。中へ入れてもらい、サトウキビをあげたりした。

夜はミャンマー最大の聖地であるシュエダゴン・パゴダへ行った。ライトアップされ、いっそう金色に輝くシュエダゴン・パゴダには、夜であるにもかかわらずたくさんの人が来ていた。見所がたくさんあり、短い時間ではなかなか見切れなかったが、自分の生まれた曜日の祭壇にお参りができてよかった。

9. 植林ツアー体験記

植林ツアー体験記

東京外国語大学大学院
MJET 学生部代表：熊谷宣樹

困っていた。何に困っていたかという、学生の参加者が今年は自分を含めて4人だったことにある。なぜ困るかという、現地で行う交流会での出し物が寂しいものになるからである。去年はいろいろな大学から合計14名もの学生が参加してくれた。そのおかげで交流会で披露したSMAPやアンジェラアキなどの歌はなんとか形になった。しかも、空手が出来る人がいたのでその人には「型」をやってもらったりと、まあいろいろ出来たのである。しかし、今回は4名。残念ながら私には空手のような華やかな特技はない。野球は高校までやっていたが、ユニフォームを着てバットをもったところで、やれることといえば「素振り」ぐらいである。地味である。しかもバットが移動に邪魔だ。大学ではボートをやっていた。しかし、ミャンマーにボートを持ちこむのは物理的に無理である。しかもボートを漕いで一体何になるのか？ シャン州に位置するインレー湖にはボートを片足で漕いで漁をするという強者たちがいる。つまり、私がボートを漕いだところで何も感動を生まないのである。あっ、忘れていた。バガンは内陸にある中央乾燥地帯である。地理的に無理である。

自分に残された特技といえば「ビルマ語」ぐらいである。私は大学から約6年間ビルマ語を勉強しており、ある程度の会話は出来る。大学2年の時にはビルマ語で劇もやった。劇？ そのとき私はひらめいてしまった。今回参加する学生メンバーは全員ビルマ語を勉強している。やるしかない。現地でビルマ語劇を。

題材は「浦島太郎」である。なぜ「浦島太郎」にしたかという、藤村会長を見たときにピンときたからである。会長は私が幼いころにイメージしていた、「玉手箱を空けてしまった浦島太郎」そのものだったのである。直前の打ち合わせのときにこの企画を提案し、何とか採用されることとなった。しかし、周りの反応は「半信半疑」といったところだった。日本でまず、浦島のストーリーをパソコンに入力し、それをビルマ語の先生に翻訳してもらった。簡単に製本をして準備完了である。

ミャンマーについては、日中に植林をして夕食後に劇の練習を行った。今回は、参加者が10名と昨年の約半数だったので、交流会での出し物も「総力戦」である。踊りや歌、そして劇の練習を毎日繰り返す。定年を迎えているとか、体力がないとか、そんなものは関係ない。やるしかないのである。藤村会長を中心として皆必死に練習をした。一体自分たちはミャンマーに何をしに来ているのかよく分からなくなっていた。

浦島太郎のキャスティングで鍵となるのが「カメ」である。なぜなら、カメはシニア組へオファーしなければならなかったからである。学生は他の役を演じなければならず、カメは出来ない。そこで私は福永さんに白羽の矢をたてることに決めた。福永さんは年齢73歳のいわゆる高齢者である。ただし、高齢者の前に「最強」という二文字をつけることを忘れてはいけない。いつも明るく、おしゃべりが達者で、いろんなネタをもっている。エンジニアとして世界中を駆け巡ってきただけあって、話の内

容が「グローバル」である。前回訪れた、Than Sin Kye 村には電気がないということで、昨年から、この村にソーラーパネルを設置すると熱く語っている。しかも、すでにアラブの富豪から寄付をもらっているというからフットワークが軽い。このような明るい人なら引き受けてくれるだろうと思い、オファーした。福永さんは照れ臭そうに了解の返事してくれた。

練習の時は大変だった。いつも饒舌な福永さんがカメの役になるといきなり無口になるのからだ。私たちはそのギャップがあまりにもおかしくてつい笑ってしまい、練習が思うように進まないのである。特に、今回ヤンゴンから一緒に植林活動に参加してくれている、ティンティンイーさんは特にツボにはまってしまったらしい。レストランで食事しているとイーさんは私を呼び出し、日本語で「ミンミンさん（私のビルマの名前）、あそこにカメさんの湖があります」とイヒヒヒと笑いながら、小さい沼を指さす。イーさんは日本語がとても上手で、気品のあるおばあさんといった感じだが、「カメさん」の話しになるとどうしても笑いを抑えられなくなるらしい。

無事に植林を終え、残すは交流会のみである。練習の成果が試されるときである。まずは Than Sin Kye へ向かう。100名以上のギャラリーが待ち構えていた。司会はミスター福永である。福永氏は英語で流暢に出し物の説明を加えてゆく。しかし、村人は英語が分からない。そんなことはお構いなしに、福永氏はどんどん先に進んでゆく。そしてついに、「浦島太郎」の出番となった。福永氏が“*This story is~*”と話し始める。直観が働いた。ヤバイ。オチ（物語の結末）をバラされる。すかさず、司会者にストップをかけた。結果として、現地で行ったビルマ語劇「浦島太郎」はとても楽しんでもらえたようである。最後に浦島（私）が玉手箱を空けて藤村会長に入れ替わるという結末には観客から笑いとともに拍手が送られた。“*You can get Oscar !!*” AUNG DIN さんからこんな賛辞までいただいた。まさか、大学2年の経験がこんな所で生かされるとは。

次の日は East Paw Saw 村での第2公演。その次の日はヤンゴンの僧院で第3公演。もはや、シルク・ドゥ・ソレイユ状態である。しかし、やる度に演技に磨きがかかり、藤村会長の「ア〜」という叫び声にも磨きがかかっていった。

このように今回の私の植林ツアーはある意味、植林・語劇ツアーとなってしまった。しかし、世代を超えて一つのもを作りあげていく過程は貴重で、かつ非常に楽しいものだった。いつか MJET が「植林とともにやってきたエンターテイメント集団」として、バガンの地にその名を広めることが出来たら、それはそれで面白いのではないかと思ってしまうのである。とにかく、学生最後の年に、とてもよい経験ができた。今後は社会人として MJET の活動を支えていきたい。

（おわり）

今回も藤村会長を始めとし、福永さん、神田先生には大変お世話になりました。針貝さん、里岡さん、中嶋先生とも一緒によい思い出を作ることができました。AUNG DIN さんを始めとするミャンマーの方々にはいろんな場面で助けてもらいました。そして、学生部の今野さん、出口さん、山田さんは劇や踊りの中心となって協力してくれました。この場を借りて感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

植林ツアー体験記

東京外国語大学、総合国際学研究科
博士前期課程 1 年、出口紗絵子

バガンの人々となかなか深く交流できた、というのが今回のツアーで得られた最も大きなものです。これまでにバガンは 2 度訪れたことがあります。遺跡見物が目的で、人との交流といったら買い物をするときぐらいでした。私が客で、お金というわかりやすい利益をもたらす。だから相手は私に対して優しいのではないかと、思うことが今までにありました。このツアーで、そういった利益がどう、といったこと抜きに、現地の人々と交流できたことを嬉しく思います。

植林する村に到着すると、パートナーと組になり、支持されたとおりにコンポストのビニールをはがし、穴に入れ、土をかぶせていきました。昨年もやっているためか、パートナーの方は手際よく、間違えることもなく、次から次へと植林していきます。私はそれについていくような感じでした。黙々と木を植えていきます。何も話さなくても木は順調に植わっていきました。もっとこずって「それはそうじゃない」とかワーワー言いながらにぎやかにやるものだと思っていたので、これほど無言のうちにスムーズに進んでは拍子抜けして、かえって気まずい気持ちになってきました。

「その人はビルマ語しゃべれるから、ご飯食べましたか、とか話せよ」。私のパートナーにそう声が掛かりました。なんとなくパートナーと話しやすい雰囲気になりました。黙って、険しい顔をしながら土を掘っていた人でも、少しビルマ語で話し掛けると、相手を崩して応えてもらえました。何も話せずにいたときは、ここの人たちは植林を重荷に感じていて、こんな作業さっさと終わらせたいと思ってるのではないかと不安でしたが、笑って話してもらえると、そうでもないかとホッとしました。

水汲み、水遣りは貴重な体験でした。村の女性たちが両端にバケツの吊るされた棒を肩で担いで、近くの池や貯水場から水を運び、植えた木々に水を与えてくれているのです。バケツの水を満杯にして棒を担いでみると、何とか立ち上がったものの、とても歩けません。水を半分にしてやっと歩けるようになりました。これを何往復も繰り返す。馴れているとはいえ、かなりの重労働であることは間違いありません。私たちはツアーが終われば日本に帰り、植えた木ことは現地の方々に任せることになります。現地の方たちは、ツアー後も生活の一部の時間と労力を使って、私たちの植えた木々の世話をしていきます。そうしてやっと木が育つのだと考えると、正直、複雑な気持ちに捕らわれます。緑化が進めば、最終的には村が恵まれるわけですから、それでいいのだと割り切ることもできます。村の人々がどういう意識で植林、木の世話をしているのか、ひとつ気になったところです。

今回のツアーでは、ヤンゴン到着時・バガン到着時・バガン出発時いずれも大雨に歓迎されました。移動は大変でしたが、木にとっては良い状況なので喜ぶべきことです。

私は初めての参加で、どのように活動するかについて、いまいち自分の中でのイメージを持てないまま最初のタンシンチュェ村を訪れました。そこでのもてなしに驚いたことを今でも覚えています。小さな村の小さな小学校の職員室に集まった人々が私たちを迎え、ごちそうが次々と出てきました。最も驚いたのは集まった一人ひとりが自己紹介と挨拶をしてくれたことでした。私たちの話にも真剣な表情で耳を傾け、MJETの植林活動への理解と、参加への熱意が感じられました。NGOがそのような村で活動するときにまず直面するのが、そこに暮らす人全員の理解をどのように得るかという問題だと私は考えていましたが、ここでは村長をはじめ全ての人が理解を示してくれていたと思います。

実際の植林活動の中でも積極的な協力体制がみられ、私たちはそれに何度も助けられました。今年はメンバーが少ない中で1000本を超える植林を予定していたのですが、村人たちは一連の作業の手際が良く、一日毎の目標本数を終えるのがあっという間でした。木への水遣りは女性も多く活躍していて感心しました。牛車やバケツを使う原始的な方法ですが、それを大切にして続けていってほしいと思います。

私個人としては、交流会の劇や踊りの練習をしたことが非常に思い出深いものになりました。数日間の練習でビルマ語の台詞を覚えることができるか不安でしたが、この練習のお陰で現地のスタッフの皆さんとの会話が増え、勉強になることが多かったです。同時に村の子どもたちがどのような発表をするのか楽しみにして本番に臨みました。子どもたちもかなり時間をかけて練習したと思われる内容で、ミャンマーの踊りなどを披露してくれ、見ていた大人たちからも笑い声が起こっていたので、交流会は大成功だったと思います。

朝早くから植林、夕食が済んだら交流会の練習と、とにかくハードなツアーでしたが、普段の旅行では知ることのできないバガンの一面を見ることができ、貴重な体験となりました。

植林ツアー体験記

東京外国語大学、ビルマ語科2年

山田彩也香

私は大学でビルマ語を勉強しているが、今回の旅が初ミャンマーだった。去年は行けなかったのも、今回は参加することができて大変良かった。普通の旅行ではできないことが経験できるだろうと思って楽しみにしていたのだが、思っていた以上に素晴らしい旅となった。

私はビルマ語を勉強しているが、まだほとんど話せない状態なので不安もあった。やはり植林の作業のときはパートナーとうまく会話ができずに大変なこともあったが、ジェスチャーを使ったりしていたのでそんなに問題はなかった。ただ、黙々と作業をしている感じになってしまったので、作業中もっと楽しく会話ができればよかったなと思う。作業自体は驚くほどスムーズに進められた。というのも、村の人たちの働きぶりが素晴らしかったからである。私は彼らの姿に大変驚いた。子供から大人まで協力して効率的な作業をしてくれたのでとても助かった。そんな姿を見て、私もどろどろになりながら一生懸命作業をすることができた。

ミャンマーに行く前は、植林の作業はとてもきついただろうと思っていたのだが、今回は最初の二日間でほとんどが終わってしまいびっくりした。村の人たちはとても優しくて、たくさん話かけてくれて仲良くなれたのでとても嬉しかった。せっかく仲良くなれたのだし、是非来年も行きたいと思った。また、村に行く度においしいご飯を出していただき、たくさんビルマ式料理が食べられて良かった。ミャンマーは日本以上にお客さんをもてなす習慣がある国なのだなと感じた。ただ、料理はとてもおいしいのに、お腹を壊してしまうのがなんとも悲しかった。

観光も、パゴダ見学やポパ山、サンセットクルーズなどいろいろできてとても満足な旅となった。しかし個人的には、植林でお世話になった村の人々との出会いが一番の思い出となった。村の生活を見せていただいたりして、日本とは違う文化を知ることができた。

今回の旅はいろいろと盛りだくさんで少しハードだったが、本当にとても良い経験ができて良かった。ミャンマーの良さをもっとたくさんの人に知ってもらえたらと思う。是非来年も参加したい。

植林ツアー体験記

玉川大学 文学部比較文化学科
准教授 中嶋 真美

ミャンマー——アジアの中でも、本来、さまざまな意味で日本とはつながりの深い国だ。しかし、一般的にはその実態を知る人は少ない。また、なんとなく「危ない」「不安定」なイメージが付きまとっている方も多いのではないだろうか。私も、この植林ツアーに参加するまではそんなイメージを持つ一人だった。

実際、ここ数カ月のミャンマーに関する新聞記事の見出しは、「虐げられる貧しい人々」「活気消え漂う緊迫感」「総選挙遠い公正」と、楽観視できる要素は全くない。見出しを読むだけで、出かける勇氣も消えてしまいそう。しかし、こうした不穏なイメージは、このツアーに参加し数日で掻き消されることとなった。

今回のツアーには途中から参加させて頂いたが、短い時間の中で盛り沢山の内容を体験し、充実した日々を送ることができたように思う。植林作業はもちろんのこと、ポパ山に登ったり、パゴダ（仏塔）の上で日の出を待ったり、僧院で日本語を学ぶ学生と親睦を深めたり、村の人々とお互いの出し物を通じて交流したり……。数えきれない思い出を数日間に凝縮した旅となった。

その中でも、やはり「植林」が一番思い出深い作業だったと言える。途中参加の私が植えた苗木は10本。決して多くは無いが、少ないからこそその愛着も感じずにはいられない。この植林ツアーでは、単にツアーの参加者が植林をするというだけでなく、地域の方々に植えた木々を見守り大事に育ててもらい、地域の発展に役立てることを最終目的としているそう。そのため、最初の段階から地域住民とペアを組んで共同作業を行う。見知らぬ者同士が共同作業をするのは決して容易なことではないため、通常はコミュニケーションのための「言葉」が不可欠になるはずである。しかし「植林」という共通目的を持っているがゆえ、少しずつではあるが阿吽の呼吸のようなものも感じられ、作業はあっという間に終わってしまった。

観光のアトラクションとして行われる植林には、往々にして「植える」ことだけがクローズアップされ、その後、植えた木や支援した地域がどうなるのかという部分に配慮がなされないこともしばしば見られる。しかし、MJETの行う植林ツアーでは、「植える」だけでなく「育てる」ことにも十分に配慮がなされた仕組みが施されている。この植林作業を含め、ツアーのコンテンツの一つ一つが、お客さん相手の「アトラクション」ではなく、「地域の役に立つ」ということを目指しての活動であることが実感される。

植林後、これまで植えられた木々の成長ぶりを見させて頂いた。年数や植えた場所により差異はあるものの、どれも立派に育ちつつある。「私が植えた木も、数年後こんなふうになるのか……」と、自分の植えた苗木の未来に期待が高まる。日本に戻り、自分が植えた苗木の写真を見ながら成長した姿を思い描いてみると、胸の内側にほわっとした温かみを覚えた。植える喜びに加え、帰国後まで心温まる気分になれる、そんな楽しい旅であった。

植林ツアー体験記

M J E T 会員

針貝純子

「ミャンマーに行ってみない!？」

思いがけないミャンマーへの植林ツアーの誘いは、趣味にしている「写真」の師匠からのものでした。正直なところ、最初はミャンマーに何をしに行くのか良くわからないまま、ただ珍しい写真が撮れるかもしれない……。そういう不純な動機で参加を申し込みました。

その後、ツアーの内容が明らかになっていくうちに、だんだんとミャンマーの危ない情報や（これは後になると間違った情報でしたが）、暑い土地での体力勝負とも思われる植林に対して不安を抱きながらも、あれよあれよという間について出発の日になってしまいました。

1日遅れでバガンに到着した私達を待っていたのは、East Phar Saw村での植林に勤しむ大勢の村人とツアー参加者の笑顔でした。挨拶もそこそこに、いきなり村人とパートナーになり植林を始めていきました。想像とはおおよそ違って、テンポ良く植林が進み、その間、村人達から向けられる笑顔にミャンマーに対する不安はひとかけらもなくなっていました。慣れない体勢で作業をするので、体はきついはずなのに、泥だらけになって汗をかき、村人と目が合ってニッコリ笑う、それだけで心満たされるような不思議な感覚を経験しました。

また観光では、パゴダに登って夕日が静かに沈んでいくバガンの遺跡やイラワジ川でのサンセットを見て、Popa山のハイキングに行き、美味しいランチを食べ、日常ではとても感じることの出来ない素晴らしい時間を過ごすことが出来ました。また、Than Sin Kyae村とEast Phar Saw村、ヤンゴンの僧院での交流会もとても思い出深いものになりました。

日本での練習が出来なかったために、現地で夕食後やバスの移動時間を使って練習をしましたが、一応の形が出来るまで何度も繰り返し練習をするというメンバー全員の真剣さに感動さえ覚えました。私達と村人達が交互に出し物を披露していくという交流会でしたが、子供達のかわいい踊りや歌は本当に感動もので、何度も涙してしまいました。今まで、色々なところに観光旅行をしてきましたが、今回ほど心温まる、涙を流すほどの旅はありませんでした。

「植林ツアー」はあくまでも「植林ツアー」という看板であり、このツアーの本当の意義は人と人との心の交流だと感じました。ミャンマーの人々との交流、日本から参加したメンバーの方々との楽しい会話、本当に素敵な経験であり、大切な思い出になりました。

最後に、このツアーを企画してくださった藤村先生、またツアーをアレンジしてくださったNature Loversの皆様、参加された皆様に心からお礼を申し上げます。また、みんなで力を合わせて植えた木々の成長を楽しみに、ミャンマーを再び訪れたいと思います。ちなみに、当初の目的の写真は途中からどうでも良くなり、日本に帰って撮った写真を見ると、芸術写真というよりは村の子供達の笑顔の写真ばかりでした。

植林ツアーに参加して

M J E T 会員
里岡洋子

2010年8月29日日曜日の朝早く家を出て9月5日日曜日11時頃自宅に着いた。この1週間は現実だったのは夢だったのか？ 楽しい楽しい夢のような日々だった。

「ミャンマーに木を植えに行く？」「嘘でしょう、危なくない？」「若い人のお荷物になるよ！」いろんな友人の言葉を聴きながら参加した植林ツアー。何しろ65歳のこのときまで故郷以外で生活したことのない私。世間知らずの冒険である。まず言葉もわからない。すべて一緒に故郷を旅立った針貝さん頼りのお任せの旅だった。

植林は2日目からの参加。まず、目に付いたのは幼い子の姿だった。どの子も丸い澄んだ目で見つめかえてくれた。こんな時間になぜ親というの？ つい職業的に考える自分に気づく。現地のパートナーに作業のことを聞くにも言葉がわからない、私は苗木が入ったコンポストの外側のビニール袋を破ることにしたが不器用な私。じっと待つくださる暖かい目を感じた。何回か繰り返すうちになんとなく要領がわかってきた。言葉は通じなくとも仕草で通じ始めたようにも思えた頃休憩になった。

翌日は私の孫と似通った3人の男の子を相手に楽しい植林だった。何事にも積極的に休むことなく植林に加わる子達。この子らと共に大きく成長して欲しいとの思いで土をかけ押さえた。この木が育つには牛やヤギに食べられないように柵をしたり、水を遠くから運んで水遣りの仕事が大変なのを後で知り、甘い考えの自分に汗をかいた。

村人の心のこもった食事はありがたくいただいた。男性ばかりで薪を使って料理が作られる時、煙が昔懐かしく幼い頃を思い出すのに充分だった。

ミャンマーの観光もたくさんでき本当に楽しい日々でした。どこを見渡しても無数にそびえるパゴダ。朽ちはてたのや新しいパゴダの空間で暮らしている人々に宗教心の厚さを感じました。

沈む夕日を静かに感じたあのパゴダ。昇りくる朝日を待ったあのパゴダ。蝶になってパゴダの上を舞っているように静かで穏やかな気持ち。自然に融けこんで入った自分を感じ、我ながら驚きました。

交流会も楽しかった。ヤンゴンの僧院で、若者が力強く歌ったアンジェラ・アキの「15の君へ」の歌はまるで植林した若木が大きく育ち風に揺れながら大らかに合唱してるかのように思え感動しました。

今、感動を抑えながら思い出し、ゆったりと過ごした陰で、細やかな藤村先生の心配りや、現地のスタッフの皆様の心遣いを感謝しています。

植林ツアー体験記

ソーラーエナジー普及促進協会

理事長 福永 喜朋

1. 植林関連

Than Sin Kye 村にもう一つ新しい村が加えられ、多くの大人の村人が参加してくれて、2.5 日で、1,200 本の植樹が効率良く出来た。Than Sin Kyae 村からも事前に作業手順を確認していたのだろう。Than Sin Kaye 村で、昨年植えた、小生の名札付き苗木 5 本、他が全て無事に育っているのを確認出来、感激した。2007 年に植えられた苗木が 5m 程迄成長しているのには驚いた。特に乾期（11 月～4 月）の村人の水散布の協力のお陰である。

2007 年～2010 年で、4,000 本以上が植林された事となり、10 年後は立派な樹林帯となり、地中の保水、外気温の緩和、周辺環境の改善に貢献出来よう。これが村の事業として定着し、地元政府も更に関心を示す事を期待する。今年の学生の参加者は 4 名、他の人を加えて 10 名と少人数であったが、2 つの村の協力で、それぞれ持ち場を全う出来たと思う。

昨年同様、村人との交流会も催され、相互の親睦が図られたと思う。こちらは、①ユカタ姿で東京音頭②日本の歌、「さくら」と「北国の春」をミャンマー語で合唱。③シャボン玉を村の子供達と飛ばした事。④寸劇「浦島太郎」を上演した。小生はカメ役を仰せつかり、ゴザ敷きの上を両肘付いて 25m 程這い回った。背中に竹で編んだ楕円形のお盆を入れて甲羅になぞらえ、頭には黒い布袋に大きな白黒の目玉を紙で造りホッチキスで止めたものを被り、浦島太郎を背負いながら、汗だくになった。お陰で肘を擦りむいた。2 つの村子供たちも趣向を凝らした演技で面白かった。特に、新しい村での演技で、小さい女の子の踊りのしぐさに感動したが、実は男の子と知り、2 度驚いた。2 つの村とも、Bagan 市内から照明器具、放送アンプ装置等を借り受け、蛍光灯（40w）8 本で舞台廻り、会場を多少とも明るくしているのには驚いた。今まで、村は夜間全くの暗闇と思っていたから。Generator は村にある個人所有の既設を利用したようだ。

今回はヴェトナム航空で、ハノイに着陸したが、小生にとりヴェトナム国訪問は初めてで訪問国は 1 つ増えて、合計 59 ヶ国となった。学生の参加を容易にするように、来年は 8 月 18 日頃からのスケジュールとしたらどうか。又、各大学への参加促進運動を 5 月頃から始めたらどうだろうか。小生は早稲田大学建築学科にアプローチ出来る。この植林プロジェクトが、日本とミャンマー友好の場として、益々発展することを望むものである。

2. 太陽光発電 LED 照明プロジェクト関連

Than Sin Kyae 村小学校の室内天井点検口から天井裏を覗く事が出来た。木造トラス造で波型鉄板葺き、断熱層なし。天井下地は 50mmx40mm 木材が 600mm 角で縦横に組まれていてトラスから木で吊るされている。天井仕上材はセメントボード 600mm 角 6mm 厚。C 型レールを木ネジで何処にでも取り付けられる。太陽パネルは地上の正面右側に設置する。校長の話では、盗難は皆無とのことなのでパネル周りの夜間照明は不要とする。フェンスは設置予定。9/4 Yangon で通関業者 2 社と面談し、見積り提出依頼をした。

10. 植林ツアー後記

(藤村建夫)

今回の植林ツアーは、第二回目の本格的植林ツアーであった。第二期生として、学生4名と正会員・社会人6名、計10名が参加した。昨年は14名の学生さんが参加したのに比して、今年は諸々の理由で学生さんの参加が少なかったことは、残念ではあったが、現地の村人達との交流の深まりを考えると、内容的には、一層充実したものとなった。

エコツーリズムは、単なる労働の提供であってはいけないし、親切の押し付けであってはいけない。それは、現地の人々と心の触れ合う交流と理解があつてこそ楽しく有意義なものとなる。今後とも、MJETは、日本とミャンマーの青少年が共同で行う植林と心の触れ合う交流を通じて、理解と親睦を深められるように努力していきたい。

協力する村々との今後の長期的な関わり方：協力戦略の選択肢

MJETの植林ツアーはを今後どのように進めていくべきかの戦略については、次の二つが選択肢が考えられよう。

● 段階別協力戦略

最初に協力した Than Sin Kyae 村は、当初から長期的な協力を希望している。すでに植林できる村の共有地がなくなっているため、今後の進め方としては、植林された木々のメンテナンスとモニタリングが重要になってくる。したがって、今後の協力戦略の選択肢として、現在、協力している二つの村に対する植林ツアーを第一段階と位置づけて、以後、段階毎に協力内容を変えて協力を進めていくことが考えられる。

第一段階：植林ツアーによる村人との交流

第二段階：太陽光発電による村の電化協力

第三段階：一村一品活動による村おこし

一村一品活動については、専門家による現在の資源賦存状況と生産物の現状を調査して比較優位にある生産物を特定する必要がある。その結果、特定された生産物をどのようにして特産品として育成するかを検討すべきである。

● 同時並行戦略

これは、植林地域を今後とも他の村々に拡大すると同時に、現在協力している村々との協力を維持していく戦略である。このためには、新しい近隣の村を一つずつ1~2年毎に新規開拓していかなければならない。同時に協力している村々との協力を継続するための戦略が必要になってくる。その戦略として、例えば、現在試験中の「ネリカ米」を各村に普及していくことが考えられる。つまり、同じ内容の協力をパターン化して全ての村々に適用していく方法である。

これら二つの戦略を選択するに当たっては、エコツーリズムの元々の設立目的に翻って、考えなければならない。MJETのエコツーリズムは、以下の目的を持って設立された。

「日本とミャンマーの青少年の交流を通じて、ミャンマーの環境に優しい観光と産業の発展を推進し、あわせて、ミャンマーにおいては国造りに不可欠な青少年の育成に資する能力開発事業を実施するとともに、日本においては青少年に途上国の開発現場における経験を提供し、環境・平和・福利の尊重という普遍的な価値の実現に貢献することを目的とする。」

昨年植林ツアーは、日本の青年が主体となって、ミャンマーの村を訪問し、村の青少年とペアを作って共同で植林をするという、共同作業を通じての交流が行われ、両者の友好関係を深めた。しかしながら、今年は、両村の大人の男女が組織的に植林活動に参加するようになり、必ずしも青少年だけのペアではなくなったので、その交流は村人全体との交流となった。これは、昨年のような形ではなかったものの、村人との交流会では、村人全員が集まり、小中学校生徒が主役となって演技に参加して大いに盛り上がりを見せた。

他方、観光と産業の発展に対する貢献は未だ具体的な成果を見ていない。また、ミャンマー青少年の育成に資する能力開発事業も小中学校生徒の環境問題意識を高めているが、能力開発の成果を見るに至っていない。

このまま、植林ツアーを拡大していけば、日本人青少年とミャンマー青少年との交流促進は十分達成されるものと思われるが、観光と産業の発展および青少年の能力開発に対する貢献は、不十分なままとなる。したがって、来年度は、段階別協力戦略に従って、二つの村を対象として、第二段階以降の活動に集中し、太陽光エネルギーの利用およびネリカ米の栽培等、村人との新しい共同作業に取り組むことを検討すべきであろう。

付録 1. 植林ツアー参加者

MJET 植林ツアー参加者

学年	氏名	所属大学、学科
修士1年	熊谷宣樹	東京外国語大学大学院、言語学科
修士1年	出口紗絵子	東京外国語大学大学院、総合国際学研究所
学部4年	今野安寿子	東京外国語大学、ビルマ語学科
学部1年	山田彩也香	東京外国語大学、ビルマ語学科

会長	藤村建夫	ミャンマー日本・エコツーリズム
理事	神田道男	ミャンマー日本・エコツーリズム
一般参加	福永喜朋	メイ・クォーター・マネージメント・コーポレーション
MJET 会員	針貝純子	ミャンマー日本・エコツーリズム
MJET 会員	里岡洋子	ミャンマー日本・エコツーリズム
一般参加	中嶋真美	玉川大学准教授、比較文化学科、准教授

Myanmar 側パートナー参加者

会長	U Aung Din	The Nature Lovers Group
経理	Daw May Khin	The Nature Lovers Group
専務理事	U San Thu Kyaw	The Nature Lovers Group
会長	Daw Thin Thin Yi	MJBYA
経理	U Moe Thwin Myint	MJBYA
	Ma Aye Myint Than	MJBYA

付録 2 植林ツアーの日程表

Date	Day	Leave	Arrive	AM	PM	Overnight stay
8/28	Sat	Narita Hanoi	Hanoi Yangon	11:00 by VN955 to arrive at 14:30	16:00 by VN701 to arrive at 18:10	Yangon Asia Plaza Hotel
29	Sun	Yangon	Bagan	06:15 by W9-009 to arrive at 07:30 Visiting Than Sin Kyae village and planting trees	14:00 Visiting East Phar Saw village Consultation and consultation with villagers on how to do planting trees	Bagan Thazin Garden Hotel
30	Mon			08:00 Tree-planting in the East Phar Saw Village	14:00 Tree-planting in the East Phar Saw Village 18:00 Sunset	Bagan Thazin Garden Hotel
31	Tue			08:00 Tree-planting in the East Phar Saw village	14:00 Sightseeing in the Bagan area 18:00 River cruise	Bagan Thazin Garden Hotel
9/01	Wed			08:00 Tree planting in the East Phar Saw village 11:00 Outing to the Mt. Popa area	Outing to the Mt. Popa area Exchange programme with Than Sin Kyae villagers	Bagan Thazin Garden Hotel
02	Thu			05:00 Seeing the sunrise Sightseeing in the Bagan area (Temples)	14:00 Sightseeing in the Bagan area (Tanaka museum, Sakura Hotel, U Ba Nyun lacquer ware shop)) Exchange programme with East Phar Saw villagers	Bagan Thazin Garden Hotel
03	Fri	Bagan	Yangon	07:50 by W9-009 to arrive at 10:30 Sightseeing the white elephants and mulberry Buddha	Visiting VFRDC in Legu Sightseeing Shwedagon Pagoda in the evening	Yangon Asia Plaza Hotel
04	Sat	Yangon	Hanoi	09:00 Exchange programme with MJBVA 19:10 by VN700	Free Arrive at 21:30	(To stay in flight)
05	Sun	Hanoi	Narita	00:05 by VN954 to arrive at 06:50		